十二源氏袖鏡　四

特別
へ12
5091
4

源氏袖鏡 第四

七 さか木

八 花ちるさと

九 須ま

へ12
5091
4

<2001-070>

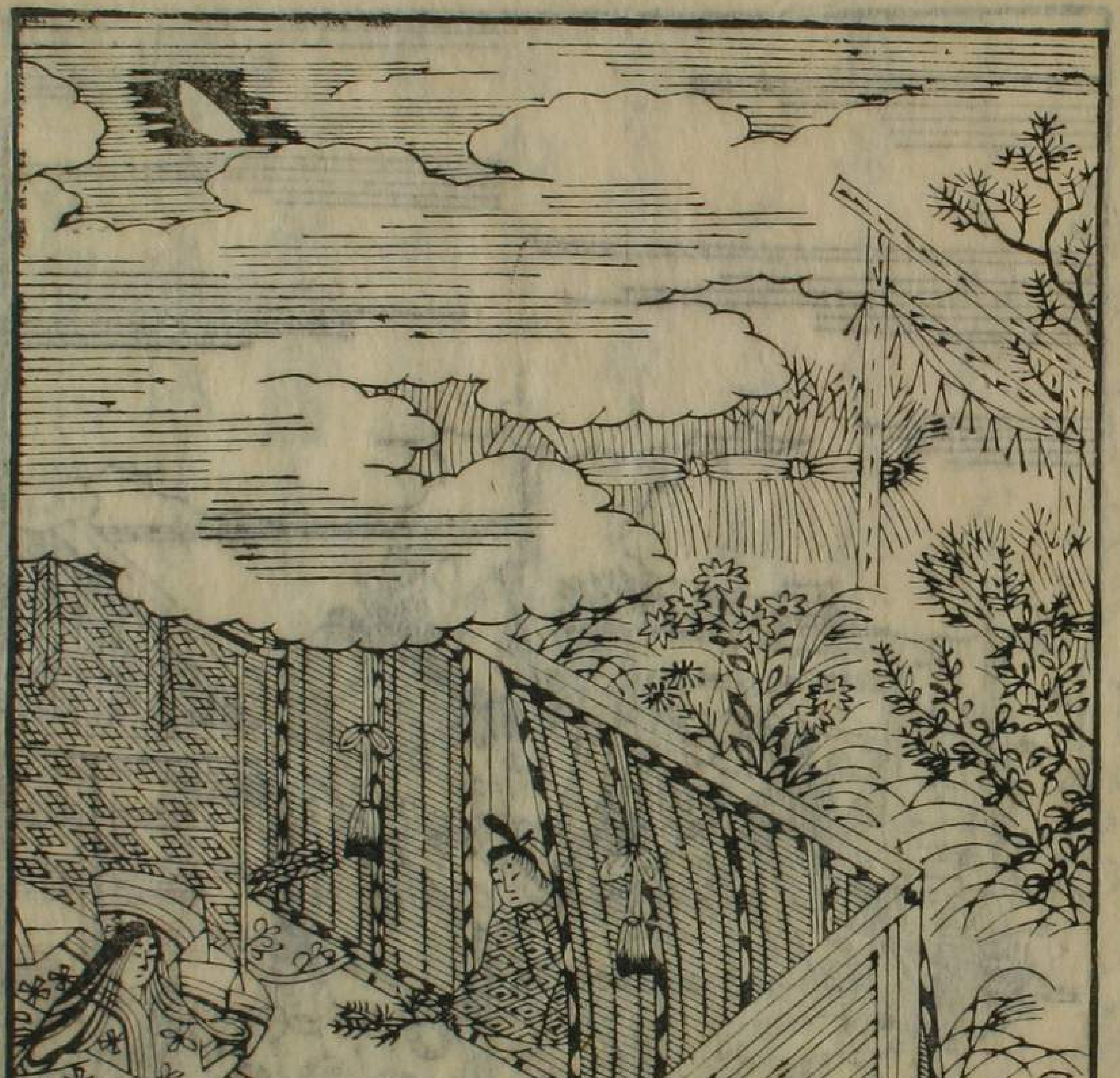
源氏

七　榊

斎宮ハさいゐんのつきまかせ野の宮より
給ふくたり光ハ桂川さいの河原也野宮の
うへまいらせし文内とさのみかとへハ物をいハ
む事なりけりやまと不ハおやうひてくりまふ
さいなることにあけてと源氏の御心さしも
かくてふかれハうき世のかれまんとおもひ
さらめく野の宮ゆるしく入まいり源氏
まするにかうきうれたまひん事をあはれ

にくきもなさけなくやと思ひしけつらく
野の宮へまうて給ふハ九月七日の程なり
はるけき野辺（さか野也）をわけ入給ふよりいと
物あはれなり秋の花みなおとろへつゝあさ
ちかはらもかれ〳〵なる虫の音に松風すこ
く吹あはせてそれともきゝわかぬ小笛のねを大
きまてかきそめたる情ともまみやらる末
のふかきハさすかにかなしくかんつうき
れものとも見えうちこにうち志ちふきてを
のゝうちも物いひさるもかうまハかたりて之ん

その〳〵なき物のあはれくきこえてほと
えんなり大将殿やうりてたひかて人宮
すゝしめくとおほし源氏日のうへのつほねを
のさかきをいさゝかおりてかハ
らぬ色をしるへそこそいかきもこえ侍り
みくれとの給ひてちりやかき神のいかきも
おもひへし大将人のみまかりさたそのう
へにまゐらせ給
神かきハしるしの杉もなき物をいか
にまかへておれるさかきそ　源氏



をとめ子のあたりと云ハさかき葉の
うたよりことはをとられ日比の物語
あはれおほくかひきこしまつり月夫婦
まやおもれるを斎宮をさためて伊勢へくだり
給ふをとうしみきこしめすよこゝろ思ひあつめ
まつらうこもきこしめくしよろ河相かしの
こまつとすきの物かたりまでいひ御んかく
す源氏もゝつよりうすなきまふ女ちる
御くえむのひ給ひぬれまきとゝら
しくかゝしけらしと見えたる源氏

あかきのまされハいつも春乃紀をとこハ世
まうぬ秋のかうらむ よはしらぬ世は たくひまさかり 松むしも
折まりかゝされハ御屋にやまそ取
大かた秋のわか道もうすしさになくね
かうへそ鈴虫の松むしあけきつ禄まるかり
給ぬかうまちかは小松立まよ源氏よりハ歌
なつの此かうへも此文ありゆかす付給ての源氏
庵海りつく少河の神もゝあわかハねね
別乃中残とされ此屋ましに女別当よか
乃世のかつら乗文

國つ神をいふといふ中なるハなほさら
またまつやさきんおもしく九月十六日に
ハ難のこやを立給てかつら川の流をくへわら
西川のみそき
おほしまなり
さるの時ようちへ東りまかなきを
取流らしのちりによりおひくいふへいさすよ
とうしかわしう綾錦ふうこやを取
その内綾分ふハかまつしと思ふれと心の
うちよ拙そうれき治つ大こく殿よおかまい
てまゐれのそうきまり給ひとハいみしくおもれ
ふくさゐされさせ給なり 安永十四年 門ハ朱雀之 出ます

とまちさそまつりとてハ着よたてつけ添
いとう車とも袖くちみんとしつわり 仇家の車乱
八着ハ中務式部治部民部兵部刑部大蔵宮内
大蔵やくてくおよひくらうかんよりおれ給
ほと二条院のそうりまれハさうまにさして
こやを取へ源氏
ゆかりもてくなふハ好ともすかう川やなせ
の波よ袖ハぬまつやられよまたハ文の日せ
きたのおまうよりこやをとらろ
まくら川やなせのちみよぬまつくをいせ

まそされかひとこそん源氏ハあはれなる名
こかゝしくて紫式ゆかりきる物源氏
と名つけぬるもやんこの物ハあふ
さか山をおはしまして松のそらハまし
てたつくしたるすかたらん院のみかと書
よれ給ふやこあはてさころおもひなりし海
せハみかよも物章あり給ゆいらんまに書
文を給ふみなつけ給へ文源氏の大将を
ハ世の情うしろこにおもひしく大小乃まを
色をてすくのさまひあらせよとされくし

給ひ書文もおりし御まゝして十一月一日か
られさせさひね世の中あはれをそふかくまけ
きまふ人思ひし在つかの中宮源氏なとの
給ふのうちハきえられたる給なけき也大きさ記
のまろまるふたりかい給ひん世まへいかそらすく
まんと思ひ給ひ給ふ宇九日まてハ女房更
衣なやまふあつまの給ひしをもめ達ハみく
の給そみりまうけるい給ちすむすれハ
大かたの此空もさちむかしの情や まちむかしたる抽の まきりを 給お
此女みなつの巻にすへちりたるをそへのこ文

かけひろこたのみし松や道にくんト
葉ちりめらしのされる源氏
はしけしろ池乃ろみのふやはきよらん
きみしうけをこぬそなれし袁とおかれて
よおまりをうくしうそあるや王命婦
さしられていま井のれもこかりこちみ
しんの君のあせもゆくかれおほろ月夜も
内侍のかうてうちよきふてひ給はれ門の院
ふさしいぬうけまとも源氏をのとあひまふ
はんまそたうひよ今もはる文かよひ文おひ給

事もあり院のおりします?とこうあれそう
おもう給ひき世と源氏もおほしまうされとあや
ふくなる流んぶりかもの新院の流ふくうて
おかはりに朝かほのひめ君はいつきり
み給へり源氏はいまさもかん蔵をあやし
く神うらめしく思ひたり此は中のみかんの
はちめかゝるかんしめくつしとおりますひま
に此の朧月夜のまかり此さと源氏と対
面し給りいかにへ乃はきたのちそなして
あひかりしもさひおかれ給めてしくろ三

にをけるねはあいかんされいあはれもは
きうきをめのやとえゆるよくくにし
もとのみやきうぬしこころさりさらい
さけとぞつけける源氏いとわつらはしくきこえ給
内侍のかミ
心からかたかた袖をぬらすかなあくとをし
ふるこゑにつけても　源氏
なけきつゝわか世ハかくてすくせとやむねの
あくへき時そともなくすくてうちいそ
きふをたくさミのりと此月の夜に松のか

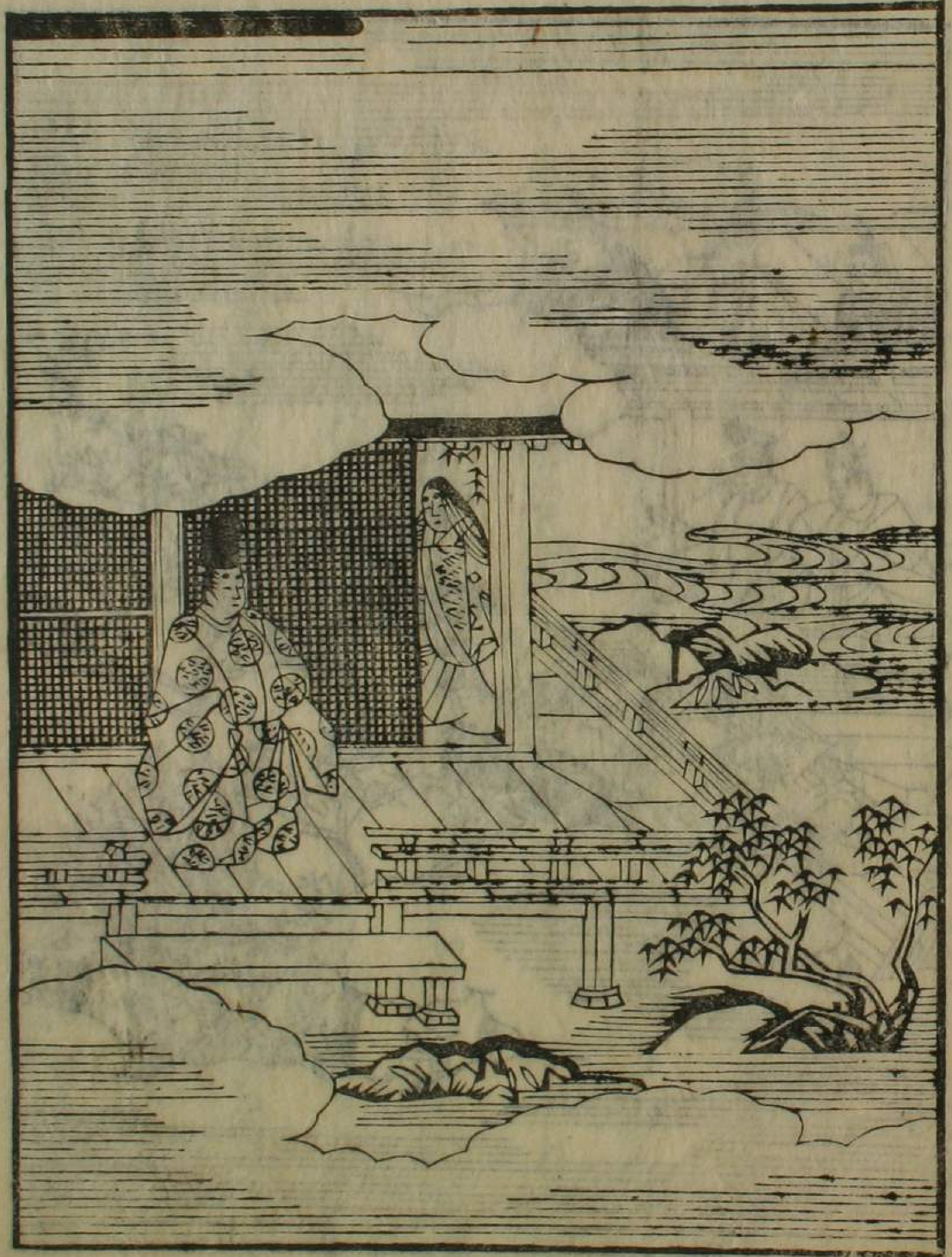
ねといふ人いそくみえさるのちふかれなんと
夜つかの中宮ハなれつきくもひきこえさす
世中をおもひしく物うくおほしけり源氏を
ハ春宮の御うしろミにおとこ院の御さため給
ひしかハそれおりしくおもふにてかの御心ハ
たしぬまゝの御むすめをほつり給りいる
給おりより中宮へちかきまつり給ひしかも
このゐんの御のまたうしめさそてとめりかなし
きちきいふとふもへきにてそこきさんと
おほしまて二夜ともり給しま御みまあ

ひこ給子ハ源氏にうしつくしとおほせとも
れんせいゐんもうつくしくかうしけなれは
源氏
あふ事のかたきをなけくきさいハさて
世ハうきけきてつんはあらまのとも給も
さすかふかく中宮
ちかきよのうらみをへなおもしてもかんへ
をおもとをらん いつこを思すてまくらん文も
みやこそすてんとうしめしくてこゝにおもひける
もつれくさかれハ雲林院へまうて給へり九

月十日あまりのほとハ秋の空もみえ給てあはれ
もわすれ給ふへしきのふつかの文衣の法衣
さうと律師にておもむきて天台六
十巻をよみ給ふかうしてみさしおほしめり
めつらしくろんきかしいさせてきこしめすを
山寺にハいそてふたかるをおこなひすると
まうらうひかしのいとゝさきゝを
まて念仏往生極楽とうちのへくれ
こえいたふとうやましくおもへやとおほしな
御まはりひめ君のうきまよひていひあかれ

猶そむきはてんなりやうき人しもそと思ひ
きゝしめしこの月頃によそにしつるのおりかを
ろとそかなしくとおもひつゞけて花こそ
をきみおもひもちしるしのきよりもちかと
けるのひとすみはてこの世もつれなきのち
の世のたのみもあらぬさもおもひさため
かたをかくするむるを見てもおもひつゝもり
されのよれはつましく心細くてはまよひ
やうやく源氏
あさちふの露乃やとりに君をおきてよ

ものあらしそしつ心なき　御返　紫の上
風ふけはまつそみたるゝ色かはるあさちか
露にかゝるさゝかに吹の風もちらさきみたれ
賀茂の斎院へは文そまゐりける榊にゆふ
つけて　かうくしうつし　猶く源氏
かけまくはかしこけれともそのかみの秋
ゆふたすきかなとありけれは御かへし　斎院
そのかみやいかゝはありしゆふたすき心にかけて
しのふらんゆへとあり世を猶いとひ山つゞ
のかみちもさせ給ふらんおもはれしうけんし



かくゆきハまふうめ御しかう露の心も見ん
ゐしかく中宮の御かたへまいり給へれは
さしていさしのはしらのもとにふしやらせ給ふ
源氏うちよりまいりのへいらうとうくたつくしく
く抛ゝあり内侍のかみにもきこえめせ
ともかくよろあはそめしことなれなとおほしゆ
御さそれより春宮の御かたへまいり給へハ
中宮こよひゐんにて給ふ雪の月さしいて
さらぬたに院の御やうのおもかけあれ
ひのありしとおほしわく源氏の御かたへ中宮

九重にきりや隔つる雲の上の月を
はるかに思ひやるかな　源氏
月ミるをいみ秋の枕にかゝりぬるをつゝはる
雲のつゝもあるかなる中宮は後うんとお
もしさらぬかなの朧月夜の涙くもりの源へ
　こかうしの哭につけてもまちしさに哀
つらきさ乃しるよへをなりおなとうよ哀のひら
き給ふもまくら給ハ涙色事なとも
涙くろいて源氏
おひまさて哀のつれのちよらよちなくて

の松丸河やうなる川の事あるしにと
あらす源氏の物かたりをひとまきつくりしをほま
かく後今はみちをとりて石大臣へはとれ
つきふかきかへとの井抱乃てあるさくなり
この井抱の装三ヶ
の大事のことなり
院の内つめくらの月中文の
ものかくへきんし
されはしつかに物かたりをかきてゆきあふ
ゆくへいふとなのまん中宮
かくらすほとうけれとやめゆくへに
そのよにあふらしくすミ十二よ中文らく

おほし給ふ山のまちまうでていのりとうけ給 戒や
れおちよ川の儀給ちくありなくれ
おそしまふま文れうちゆきつてうきみちる
まちこし石川まうて物まくはま給源氏
月のまえ夜をゆとけくちのふもけ世の
やうなくよやまとつむ中宮
大きれうきよつけくいつくとも川さこの
世説ともさきへきうしらつおかまと抱乃
をあはれなるよあはるをうつそひきへぬ抱
ふかく女房すくのえんたるよ源氏とるさいり

まへり源氏

なりあらはすみところにまつしれ

よろしれかうし海れ侍る人世給へし入日

の衣とそよ名中文

ありし世のなこりたちまちうし給よ之

よろ源のちつしきらか友またひて三位の

中将まつす給くめんさうたしはし給 掩韻之 ちういんの

宰相ちいさき右すそてささてちつ 源氏右かく

なる文字そていひあつるとおぼえのことさき

かち給ぬ中将乃もけりさの日たりしのまかしれ

志やうひ宰まきりかきもて出給乃花さう

まよりも志めやうよ思ひきりにほうちうさけ

あうひすふ紅梅の右大臣おきますてうるなさを

うるひ給や八九りおと海し姉をさゆかたを

のとうくふそちめふ中将ぬうけまつり給

江の中将

それもとけさひをおろちり花ちとそ

らぬ君かうひとそころかくおてれかうて

をとり給源氏

うれすてと給さく花のたちの夜よし

あれまきうし自よかとすくまとろへうろ物

ととてうちわらふかたしくきこ
しめしけるとそあるつたへきこしめし

八 花散里

是ハけいてんときこえしとあるハ麗景殿女御
の時代女御にて侍りけるその御いもうとに
源氏をやうやうあひを給ひしこの君たちに
ちる里なりそうらうひと所にて又給よりも
なるもあさ夕につけく源氏の御をくみ
にくきものたまへも御心をもよほされられ
むくもしきまゐらくれ給ふさ夜のとやう
よおほしませハ源氏もあはれなるかへかひ
きこしめすり又月夜のめつらしくされさるやし

さふその比かたふたかりますとは中川のわた
りおはしますにきのかみの家にわ
らんよしやうのことしへおりさる源氏は
見ぐるしからで見えいまはしも大きなるかう
のまれとなる風にまうかの比おもしおかれく
けつひおりしき紙角もちゐつめ見給ひし人
の尾とかたちをみ給ひて比車をすしつ
まかせくこれにもいをいまふおりもしれ
二しらざりける源氏
おもひくみえこそしらのうれぬおもしこまする

比さかりし宿のうちとりにけやのふしの間よふ
人くみたまひやかの家しまさしてほ
あるすかりたまいとしきます
郭公しもしゐもしはそれまたれとおあおもへ
つれな月夜のひかりとしとさかにあさくしつ
まれはるそうしなて花ちる里の比かへ
ひかりなともしるくさしおもひてあかおれ
しますなつはゐ夜のかたにて御袖のかは
明かりつらきののやうつぬおもふ打ちく
しつひきまにちうにおもひさかりしもえんかりし

いふなりてとあり引歌 明しへのことなる人
も郭公いふなりて少しなきなく源氏
をちりなれくとならしときゝすき花散
里をおもてそらふけ哥ゆへ思くさま女君を
も花ちるさとゝいへり女君

人めなくあれたる宿ハ立花こそ
軒のつまとふなりけれ此花ちる里ハ昔そう
をせんられまいて六条院つくられて北
よつのりし給ひし時夏の御方となりし此花
ちる里なり

九 須磨

朧月夜乃内侍のことにて源氏あひつゝお
ひ兄の事ともれさり朱雀の帝の御はゝ右
大臣の聞に内侍のことをおほしくる時源氏志
のひ入給ひてすまにかくれ給へいろめしう
事あけましハみ事了此わたりに女房たちも
まいりつとひて源氏おほすへきやうなし須
此よりひに内侍の所方へちりて御涙てまこ
里給へり志川心すく内侍のことたいめんし
給ひその事世に立きあひの帝まつされて

出ありけむかひさへ坦ところかりちいまふかり
これゆへ源氏きちやうの内におはしますとお
ことさら給ふか朱雀院の御母大きさき
おほろ月夜の御あね也 とう殿のをとめ給ふかされハ御門
よわきみよに給ひて世の中まつりこつく
なりゆ源氏の御ひかりもさかく都にあらん
ましハ見よ海さりてもちゐかしくもやな
らんと思しめちねかの須まのうらハむへ
よう人のたてうけこもとられとしつるれ
心をくかまのふたまれにあるかと哉

給ハまん人ましくひかてけるんかなまかよら
そと思ほさり世の上れ思わうなりくさき見んと比
給のきれ心つくしたり哉よ思えしまさなと
も官位なくいとあはれなりと見んて御とし
もこのひて御心やうかくもむもんなりし也
二三月ゐ給くひとりの大殿へ葵上の御父なりゐり給
御車もあしろにて打やつし女のやうかりて
かくろへ入まいり若君うつくしきまそもし里
おハしまし給ひまれあへ給ふ源氏の御あり
さ侍しのひ給きしめんし給て故

院の御ゆいらんをも又きこしめさるゝともなり
いかにして御袖をひきちらし給ひそあはれなし
ら給さうはまになしても思ひうしなひし
御子のみこと申給三位の中将も参りあひ
あひて御みきまいり給 あそひ乃はてに大宮
よりわらはの御めのとさいしやうの君して
おほされきん人のはてきぬ給ふしやうそくこれ
せ給へと申給 源氏
かゝる山りしのふりも御らんやとあま
のころもやくうらみすそゆく御色大とや

なき人乃うへなれやいとゞ色こからんけふり
こそわかしやうおもてはこゝも中納言殿
といふはあふひ人ありこよひはその人ゆへかく
まかり給てこ御やうふうひのうへたえぬは
そ○はむねりちるきしきあはれは御源氏を
引哥 人あえよいゑ○はむま○はさうれてなひ
と詞よあけく給ふ此二条院よくり給ひまゐて
御かうひまたは人のけもなしあかひは廿余にかぞ
まそてまいらるをあるひは御ともよきまつる人へくは
わかうしのまうれおもしむ給ふれは不さく流蛇

ひける車ともちうくうちしきて世はうき物
まもあるかたをおもしろしのあいまかりし
もされかゝるあめ晴しまいりとあかえきゝ八
ともまそのこま娘しく今おきなつとのぬぞう
たおもし前朝をどし月へいかる人こもち
らんとよそ御めのことゝまめ給日たく添まて
御座こそかて紫の上とうかたくさみあまふ
ま源氏乃内弁その中や 横まの業兵ア三位 仁の家
の中将まみまつかさいめんし給ひんとて源
氏きやうらしまより給つるまおもやせまへ添

なけの我かうしあてはきこえなれはこのよは
はかな乃やうりや応せしく侍るあはれなるかなさ
かれとわ給へえひめ君なきことをひとめうけ
てんとこせまついとものひかりし源氏
方はくてさすへぬともえらおくりきこえ
ぬくまの紀をたちれし紫乃上
まかれくも紀たとまるぬまいかなきを
みくもたくさめてましたしらされはぬく
まて涙を海さうり給さ海のめくされて
とる我こてらこる人の中よたくひ有しと紀

まかれ給へるにハみなかへり給花散里
のいま一夜ハつゝしみやすらんとて
おもひも又まさる人おもふ袖うくおほしていかう
あかしてかへりまいりけれハてんくかほ
まへ立よりあすとよろこひやかし給ふし
の川まとにハ秋かうしてさらへまかはし
ちゝく月をながめてれ袖かわきて給ひとよ
ゆかき袖くたかよかりみしられ秋の雑やと
中納言女君の雨そ小夜ふかき月のやとりて
わすれなき月守　あはれ深く袖ぬ給ふ給ハ

わが袖に露そ月さへぬるゝかたるおほし
なけきて女君
月影のやどれる袖ハせまくともとめても
見ばやあかぬひかりを源氏
ゆきめくりつゐにすむへき月かけのしはし
くもらん空なゝかめそあけぬさきにといそう
き給ふかくてよろつのことしたゝめられみさう
みまきの券なと又くらまちとも紫
の上に流め乃と少納言の君をかくしき
人なれハわたしおかれ給ふおほろ月夜へ源氏

おほせなき源乃川にさゝしやなるを
みおのつくしめでたかりけん物語おぼろ月夜
源川うつふみすゝめもきこしめしぬへしなれ
てのちれせきもまゐらせてまかゆかりのかたひ
人うちともなうしくて紫をとえんとおもふらん
人はむかしたのゆかりにさうらふへしとてかたくは
つきなく地とも給はせて西のかたへやつしまつり
抄のゆかりやとかれぬめまへきさん乃ゆかりこと一川
文文集あたくれのゆりうけこそかれども
きせすふおとひは文かよひこ院のゆかりおほす

こなんとて係かふあつきけて月おもしろ
なれはまいり入道の宮へまかり給ひて去文乃
ゆかりぞそらみに物く物語を給はらん
をたまきにかしくも書写の御代うかのと
けくりそのさまふそことをいりたるや月さしおい
ふたりかはし乃ゆかりふ紫かゆかりとゆかことを
例くやとも給はく御文ゆかりくもあまくやくた
めしひめ女宮しき也入道の宮
かんしはなくあらたうれき世のそて給
そむきしうひもなくくるを御源氏

わり捨しまゝかきこともつきけれと又そ
こ乃世ならさは侮られけるゆへてあれはあり
世の人あわれさふとおもふと人ものゝく過
とおもふ中にも賀茂の御やしろ車ありそ
かし日源氏の御ともにちかし右近の丞乃
蔵人とは殿上乃御つかひをつとめしたまへく
あれは今は御人になりかへり賀茂の御子
の御社みちよりかみさまかうれはその時の事
おもひあはされて都にて御ある日をとりて蔵人
のかたとのせう

ひきつれてあふひかさしゝそのかみを思
へはつらしかものみつかき　源氏もかなしけれ
ともさりてみやしろにおりて神に海を
よし給　源氏
うき世をはいまそはなるゝとゝまらん名を
はたゝすの神にまかせてとちかふとおなし
き海のかてうたを身にしみてうつろひとおもひ
きこゆる御さかいは草もたなひくかひ森のこすち
こゑく河されせよゆのことはかなく
給へともそのとかりもえうけ海みて孫を

なく成まふ人をいさめてこなくうれしきわざ也
かゝるおりしも月も雲かくれて心をこらし
よおかしけれおほすらけれやらんしたる源氏
なきかけやいふかひなきむすひつかさ
月もやとれぬる夕かほの宿へ行ふしなさ
まふちかきたのさくまつけて源氏
以川の文書代文古の苑をとん時うし
あすら山ふみしていまさいとけなくおりしませ
え所色をも尋ぬ
さむくちらかれと旧もいち花の

ミやこをふりかへりみよ やよひ廿日
おまつの鐘よみやこをきくれのふ立たまふあら
つきは播まへるかほりうきてみゆまれおけ
播ひえしの身に居まゆく紫の上とよひお
ふまへり源氏
いまの世乃まれをもちて紫かくていのちを
人は明まゝかなるる紫乃上
指しうらぬ命よくめのまへ代まれを
きかしそうめてしう行路面のけつてなひ
てゆけし行く身よのかならひぬむかひ風さへよひ

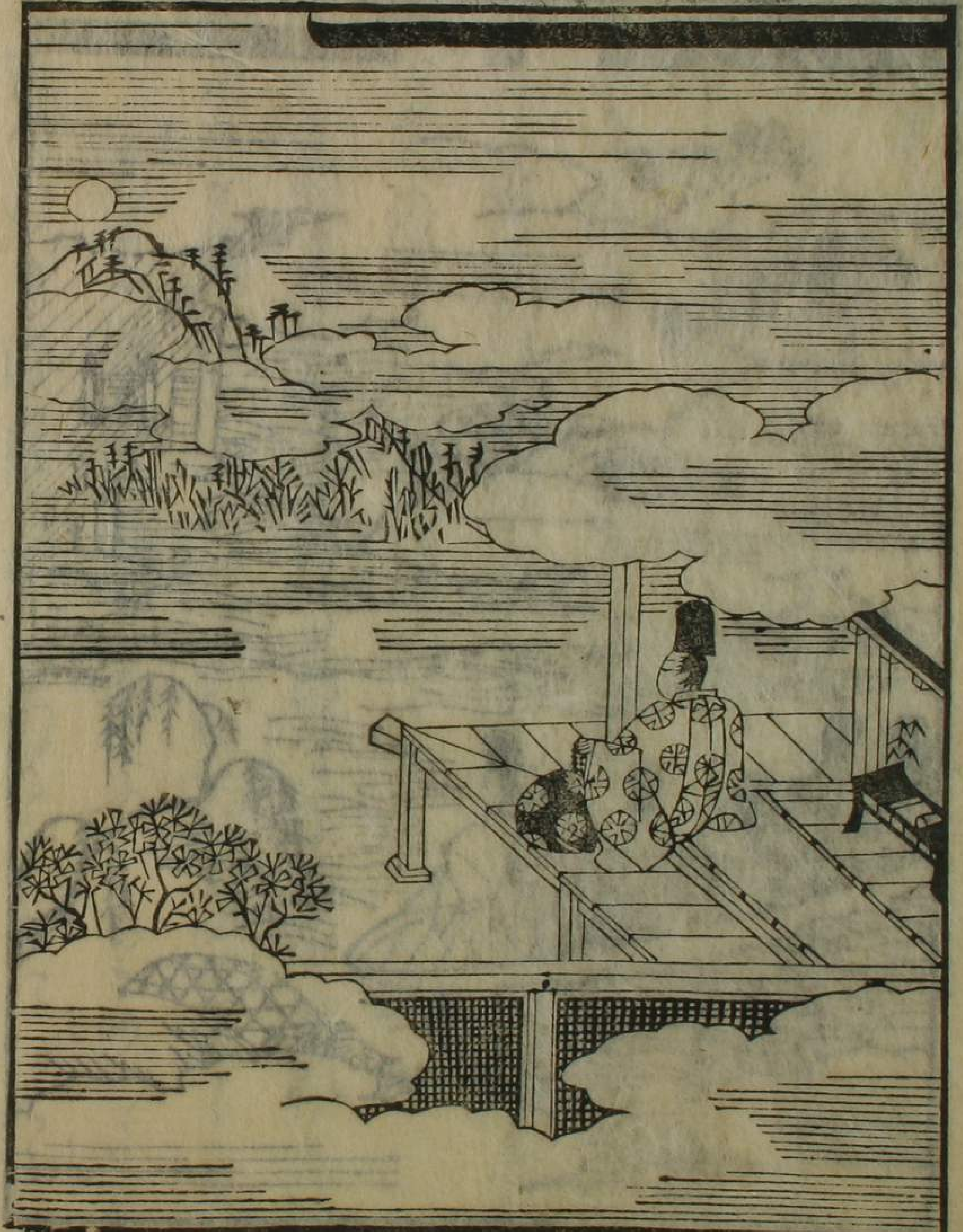
てまさくれ時はか乃浦まつき給ぬおほえ
夜とはふ知るかうあれて松かわれ志るし
なかなか 大江或ハ丹文殿京の時の狩飯なり 源氏
かの國よなみ代のこしかた人よりもゆくゑ
志られぬ哀ぬるやさん
夜半をみるのきこは風かよ道とある也
源氏ハおほしも井りおもしまさ人ゞ有ハの
行平の中納言此すはされつま此ひたる家
ぬちかきわたりなりし海つらハやゝいりてす
こけなる山中也前のさ海よりかへしめてみなる
つくて都をふかく思やもあはしなけらちらかく
尾ちすとめつらに志つしひすから氷緩なう
やかなりしたて行せんさいたる時のまふ見
所ありて志ちすし給つりやうくなる夜乃は
またわって船の事康しくて源氏よりの人
いらしたくさせ給紫の上と入道の文はれ文
いふきも御かあるも源まへまされおふ文へ
其源氏
松し海のあまれとまやもいなりんも海の
うし人志深ふる比おかしの月夜の内纏のうこ

のゝ文ハみちのかたもおやうきれハ中納言の
家にいふ女房めくる人の文つかはすその中に
いれてまゐらせけり源氏
こゝす須磨のうれしきにつけもゆかしきよしを
やく海士やいかゝおもふらんおもはくみのあかすも
同文の中に明石巻を
海士なるくらまくにつむさきれハそゆるを
かりよゆくゑそなき入道の文
志ほくみのつら衣をうすみつゝ須まよやし
海のあまもなけきをそつむ塩くみの上の比ゝ

ハあはれなる事なりし　已上
らし人の須ゐむ神まかくみよ浦ちへさ
すより此歌を（文海よりの方ハ朱書也）かの伊勢人をさそひ給
ひし六条のみやすん所しゆもまつり之頃まへ海
濱らひまつりさかれ文ハ志ほやきうれ都とや女
まいをつけくもみつさちとこ所おわり真宗
らきめかり花をのおもハいたつやまもし
阿ふてを海人のいよりて同
いせの海やしほひのうちにあさりても今
たひなきかけはいもいさり哀れ浦のもなとも

ときらくあれこそは使さへむつましくお
かくこうりまくてかしこの物語をさせてき
うしめしてわやらく今きわつきつひの人
かりけるしきかふしのて帝つへし源氏
せん人の源乃へくとこのまうまめへ
うその事し物語又
あまうむるけきの守まされて河
まて海のうらにさあむ花ちる里わかも
あま海さろ粉のよとなりあつまさく
もあ乃う風神れとあるをまにむうち

外乃しろミもさき渡てあんと摂津や
ろ秋もたちぬれ須まにはいとゞ心つくしの秋風
に月可木のまよりもる風月の氣されハん
流るゝの秋ハまたなくあはれもふかしとおもハれ行
平の中納言の関吹こゆるといひけん浦波
月可摂人乃たゞしくすゝしくなりめしせき
吹こゆる浪まの風よるよるハげにいとちかく聞
えて又なくあはれなる物ハかゝる所の秋なりけり
まくらをそばたてゝよものあらしをきゝ給ふ
に波よるのよるのこゝちをひとりめ



ときしはて琴をひきさしはかきさう
ちすうくきこゆとて源氏
薫しらくうく様よ源しなうし法には字ふる
よゆ風やかくらんいとつましくされいろく乃
うらはつきてき海くの結もとうきすきは
つらひ見うぬの世すてきといとめくさく見所
ありけるおうに七八人よしすれさうてい名
此世の世よよるとよふちゑさうそのりとめし
てなくりゆへつゝまつせせやとんゆとあり
あへりよ桜常のりしたるの綺ききなりお

さいの花いろくよきにさられさうタされよ海
見んやうて程うよおはてそすとのふ法
き後あり浦しくさよんぬしるとんを
のこ海やうるれなとしちるきあやのれそと
もきはちやうむたに弟子とりのりてゆ
海くふよとはれし出世よしら寸きこゆ和
きものうさひめるちりてこきりもちいそれる
のうくもこゆ居のつくるそてらく秘うら
れよとにまくりおるめはて海のおもうと
きよひまつてれまつさらうきれれはくまきへお

里源氏

さつかハさまき人のつるれやさひの宮

ちふしたのあ所きよし給

うさつ孫むしのしそおかゆうりハ

その世代さまうちねとも 住吉 氏ア大輔日一人

ゆりしそこ世話をてなくりかはせられよ

犯まもさひろうるれをのせう

かさこ世おくさひ乃そしたるかわるとも

つふをられぬ我をそすくさむこよひハ十文

東たわと契りもくところくよなくあ給

ゑんしと云やり給ふ月のかれこゆきれ給

源氏

こう独りきりしちくさむめてあゑん月の

みやこハたろうられよ殿上の御あそひも更て

くむりしのこよひうちの御門乃なつかしく拙

ろりし給ひし海も忘しく思おく源氏

うしそのとえさくて物ハおすそしてひさう

みきしもめうて独りかはこうろたまいのた武律

ゆしきのわすこ乃大武のむとあいふかし入文

岩の舞ひめたかしときる源氏の御おりひ

人そうはわかしき文の大郎によりて
はらへなとりいまちかよりてのかたかやう
に源氏も須磨におりしもすまをさてそのの
うちさへそつしく世をも八重の大貳は五節
おちるをまいりをさりめ君は
五節の離にほまとめして給はくさは身ゆ
すふる君をしめや給ふしのかた風にむて過
てきこゆへやうにまいり給ひ源氏
ありてひさてのつる札とにていてうち
過ぎしや須にれいし波源氏もやことの御絵

てもたえをされぬすかはりかしかる女ち
をにぬやけ八宮にわたりてはくみかへり
わたらしますうし須の山よりのさまく
もりをされやきまかくまんと思ふかるに深と
紫御にかをぬかたわかくなり源氏
山川のかわりよけるすくをこく
ひこまんこかる雲人まいのまもかれ姫ね
あくつきのそふちらあわれまたく源氏
さきちらおろしむすうくあくつきいひと
里離きめのこともたのましいかくるの月すく

こゆるに源氏ひとりごと給ふ
ふるさとのやらよりかよふ道も隔てはさん月乃
みやこにもみのしらしくもりぬらんかゝる
ゑよるかけおりつけくうちかれきる時
おほちゝきゝ給ひてうちへつしわたり来れ
播磨の守さはちまめて日あまくつれしくなり
当殿のきさらいはすゐよ御あんてゝ世の花
のそんいとうらしくおほしめく源氏
前とたくさや人の恋しきに播かましく
まふもきたなりかの松の中おもかんとわきい

むすめの君ときこゆ源氏をあさゆふ恋しく
おもひなりて世のやうにもてつらふおもむきも
いてゝいさんと折ひとへてよそにも渡へ来
まつり源氏もうちとけあそびしくちれき
もひとつ海そこられかゝ中おはともまみ給へ
るさ海とみのかなはいとむつかしくしあはれける
あのさまなどかいてんやうなるに竹あめる
かきしわたし君のさし松のはしらおりあつれつ
をりぬて海めうしぬまひあつき海みまし
所につけきうかへて志めしかり内たゝやうれく

もゆかしきれきうしけるにおほよの将衣
さしぬきめ中ひろけれはそてなしゆくら
にあまれきうたうわさともゆきりく
うい川御もてまつりおかよめしてもうしふ
こし侍りき海なしと心世給ふはまつくやまけ
なきさ月にうれへとさえはゆあつりけれぬき
てうつりをのまとゐもうひと云つ衣より
ゆうまつりなすあみなと流さりわりし給
て海すふれうつけまつりて思ひのなまし
なふるふくまのきうゆきのうちとめるあ

にほんし給みなん人なるとなすれ流るるも
ちかうたそへにほそとくふもめくしとみん
まふあるしの君よりの中緒の清をそりにて
ふるこ海なりの給あもりみとこさいかそしう
こひすまり　源氏
あふをみちの雲の行くらむうらやまは
まへかくわかるゝ清雨さいしゝやう
あかすくにかかりのとこよ緑立まされ花
のこやこふ乃やまとうん　源氏
ゆちくくもひかふ浦もうしにみよあゝは

ちる日乳くまわれきあそ宰相
ことかうさやみよひより殊をとそすくつゐ
さすへしきまとゐつ思ひ給ふらわを
くすしくてなくめらし給ふ三月ついたちそ
きうらみの日たらりかく若いある人ハ廿日つく
志まふとも海さうしきへ申しわたうを給ふも
椎りしく契りめしくたくせんしやうたうか
ひきうち系にめして源氏らうら浦へいそ
給つりせんしやうハまく のやうたりぬさ 此国よりひたろらん
うやうしめしく系まて浦まへせきさ給ふ

こくし給へるうりて系よのせくなるを
とみまふよ前るまよろへられて源氏
ちつきわしくたうとせちうにあられきそほ
うに安ハ袖ハうすしきを文
やとよろい神もわれともふんとるせ
返つとのそれとも道ハゆやうによみてまふよ
うらうき急く風ふきかとたかひちうき夜
とら海わきそへくあしとそうなり海の
おすそハふきまはひきそわらんやうまひ
まみちそかうしてあらりきうり

しかしてこの池のほとりへまへ人それこなりけるこそ
なきも海士ともさへつりあそひくらしけると
ろとまてそのき海もなき池きてなと
よわきそにいまた姑のねそとてこりあり
くと見ん姑らこの中にてうわうの池めてすら
池にそて海底を見入ありとおかしきを池む
つくしくてさしまてかねもたへかなくおもひけらぬ